



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.277
2026.10.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。



故郷茨城県の文化遺産を護り続けた人びと

ひたちなか市史跡虎塚古墳等の調査と保存

鴨志田 篤二

第11回 ◆ 東中根遺跡の調査(1) ◆

東中根遺跡は、那珂川の支流、中丸川左岸を臨む東中根台地縁辺部に、1×1.3kmの範囲に分布する弥生時代後期の集落跡である。

本遺跡は小字ごとに笠谷、大和田、清水、堂山遺跡などと呼ぶ研究者もいるが、出土土器は「東中根式土器」と呼ばれ、茨城県北部の弥生時代後期の土器型式の標識遺跡となっている。

遺跡は縄文～平安時代の複合遺跡である。このため川崎純徳は、『勝田市埋蔵文化財分布調査報告書』(1975年刊)作成に当たり、遺跡番号を5桁で表示し、最初の2桁を行政順、3桁目を時代、最後の2桁を地区内と表したが、大型農業機械の導入などで出土遺物が散乱してしまい、時期別の明確な図面にはならなかった。

最初に東中根遺跡の出土土器に注目したのは、那珂湊市在住の医師藤本弥城である。藤本の生誕地である那珂湊は、水戸城下から12kmほど隔てられた那珂川下流の左岸河口に位置し、水戸藩の中でも軍事・経済・教育の面でもっとも繁栄した地域であった。

藤本は1916(大正5)年生まれ、旧制水戸中学校(現水戸一高)に進学し、水戸中学校の連見護照から歴史学の薫陶を受け、また生涯を通じ考古学の理解者となる瀧田宏と出会う。瀧田は多賀郡櫛形村(現日立市)生まれ、慶応大学史学部を卒業し、水戸駅前の天恩ビルの支配人となり、茨城県文化財保護審議員などを務めた。

藤本は水戸中学校在学時代に、大洗町の磯浜小学校遺跡、同吹上竹之下貝塚、鉾田市夏海成田遺跡、那珂湊市宮前貝塚、同小川貝塚、勝田市三反田貝塚、常澄村大串貝塚を調査している。(拙稿『古代文化』第66巻2号(通巻第597号)「連載：考古学人国記―評伝戦後日本の考古学を支えた地域研究者―(2)藤本彌城と先史資料」公益財団法人古代学協会2014)

藤本・瀧田のことは、恩師山内清男の邂逅によれば「…縄紋早期は吾々の時代に知られるに至ったものであって、その内にもっとも著名な文様を有する田戸下層式は昭和10年ころ当時大学生であった瀧田宏氏、藤本弥城氏の標本中にあることを知った。同君等の長い研究中最も古い発見だと思う。…縄紋草創期は最も近年作られた区分であるが、その後半に位する縄紋多き形式群は藤本弥城氏によって戦前から注意されている。」とみえ、藤本等の研究姿勢を評価している。(山内清男『縄紋式研究史における茨城県遺跡の役割』『茨城県史研究』4)

藤本弥城は1928(昭和6)年頃、東中根遺跡の堂山から出土した一括資料を、父親文兵衛(歯科医院開業医)が知人からもらい受けた資料を頂く。この土器は、1962年(昭和37)に杉原荘介が『日本原始美術3』に東中根式土器として掲載する。(写真)



1968(昭和43)年に東中根の西野茂男(筆者義兄)宅のぐぼう掘りを手伝いに行った兄、鴨志田恒男から、1か所から多数の弥生式土器及び炭化材が出土したことを知らされ、川崎純徳に報告した。川崎は早くその報告をするよう促され、「勝田市東中根遺跡の弥生式土器」として『常総台地』4(1969(昭和44)年)に投稿したのであった。

このような経過を以て東中根遺跡の調査は、勝田市史編さん事業の第1回目の調査として実施された。川崎は東中根遺跡の調査を始める前から慎重に計画を立てていたものと思われる。

馬渡遺跡の第1次調査の時、A地区に整然と並ぶ9基の窯跡の調査報告

の際に、調査の責任者として見えた杉原荘介を、大塚初重などとともに東中根遺跡へ最初に案内している。



写真は、馬渡遺跡の調査責任者としてA地点の斜面部に9基の登り窯を前に成果を大勢の関係者に説明した際に、A地点で寛ぐ杉原である。その後、杉原には虎塚古墳・後野遺跡・埋文センター建設などで指導を受けた。

藤本は、『那珂川下流域の石器時代研究Ⅰ』(1977)・『那珂川下流域の石器時代研究Ⅱ』(1980)、さらに『常陸那珂川下流域の弥生土器Ⅲ』(1983)の3部作を刊行する。この報告書は、藤本がかかわった多くの遺跡の報告であり、藤本は医院の病室を空け、そこで資料整理を行っている。そして少年時代から収集した資料を拓本・実測図・写真を添えて報告している。藤本の研究に対する姿勢と人徳が偲ばれる。『常陸那珂川下流域の弥生土器Ⅲ』のなかでは十王台式土器の命名についての由来などを詳細に記しており、郷土茨城の先史資料の基本文献となっている。

茨城県の弥生時代研究は、宇都宮で開業医として考古学を研究している田中国男が、1939(昭和14)年から3年間調査を行った下館市女方の調査を嚆矢とし、人面土器を含む弥生中期の女方式を発見するが、その後の研究は十王台式土器の間を埋める各種土器の編年作業が中心となる。

1951(昭和26)年に茨城町長岡遺跡を調査した伊東重敏は、A号住居址から出土した土器に長岡式土器と命名して研究に参戦したが、これに磯崎正彦、佐藤次男、井上謙安なども加わっていく。この後、東中根台地の豊富な資料を掘り所に土器論が展開されていった。東中根遺跡の調査が研究に大きな影響を与えたことは間違いない。井上などは東中根遺跡を調査中に訪れ、原位置論の指導を受けている。また、行政発掘の抗議にきた学生に対して川崎は、「折角良い遺跡にきたのだから手伝っていきなさい」と指導している。川崎が東中根遺跡の調査にかける意気込みは、馬渡遺跡とはまた違うものがあつた。



写真は、調査の成行きを心配して駆け付けた所有者の家族と調査参加者の集合写真である。右端が星山芳樹で、団長川崎を助けて那珂町額田遺跡の調査や茨城県史のトレースなどを行った。その左隣が筆者の姉弟子である。その左後方が所有者西野茂男で、その左が池田正雄、その左が西野家の長女富美、その左が星山とともに調査を助ける星田であり、星山とともに川崎を助け、1次調査では車の運転手や出土土器の実測図などを行った。前列中央が敦子、その右隣りが有名な三人女性軍団である。全列左端の川崎のまじめな姿から調査への意気込みを知ることができる。これらの人々は虎塚古墳の調査にも参加して活躍した。

中根小学校は1873(明治6)年に市内最初の小学校として発足したが、昭和48年刊行の『勝田市立中根小学校の歩み』の「中根小学校の歴史的環境」では、東中根遺跡出土の土器が説明され、茨城県史跡指定十五郎穴の写真や虎塚古墳の昭和20年代に撮影された写真が掲載され、「…昭和48年から8月20日から9月20日まで約1ヶ月間市史編さん委員会に置いて虎塚古墳の発掘調査が予定されている…」と記されている。発刊日は9月8日であり、その数日後に横穴石室内から壁画が発見されたのである。



*巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。

目次

■故郷茨城県の文化遺産を護り続けた人びと(第11回) 鴨志田篤二 …1
■考古学の履歴書 考古学とともに歩む(第29回) 山本暉久 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第269回) 西谷 漸 …3
■考古学者の書棚「水戸城公式ガイドブック」 関口慶久 …4

考古学の履歴書

考古学とともに歩む(第29回)

山本 暉久

29. 昭和女子大学での考古学 その2

大学での専任教員生活は15年間であった。今思うと長いようで、あっという間のような気もする。教員になる前の大学のイメージは、長い伝統のもと、学生たちに毎年教育を続けられたいのではと思っていたのだが、実際は、大学の生き残りをかけて不断なる変革を続け、その歯車の一員として努力することが求められていた。だから、個人の研究成果はもちろんおざりにはできないが、それにもまして、学科の運営や新たな取り組みが必要とされ大学への貢献度が求められていたのである。

昭和女子大学は、少人数教育という特徴を生かしてきめ細かな学生指導が行われていた。とくに各学科では学年ごとにクラス担任制度が設けられており、ホームルームを毎週1回開いて、そこでクラス担任を通じて大学からの連絡事項などを伝達するようになっていた。また、これは昭和女子大学独特のものであると思うが、各学科ごとに3年生までは春と秋に2回に分けて「学寮研修」と呼んでいる宿泊研修が、神奈川県大井町にある「東明学林」と千葉県館山市にある「房秀海浜学寮」と呼ぶ大学宿泊施設を利用して3泊4日で実施され、教員は学生たち引率し指導することになっていた。また、4年生は、夏休み中に希望者が参加する方式で福島県猪苗代町にある大学施設「会津キャンプ村」を利用して「会津学寮」も実施していたが、2014年に寮は閉鎖された関係で今は実施されなくなっている。

私は、はじめの4年間はクラス担任になるだけであったが、その後、学科長、大学院生活機構研究科生活文化研究専攻主任、人間文化学部長、大学院生活機構研究科長を歴任することになった。ポジション的には、徐々に責任が増すポストに就くことになったわけである。

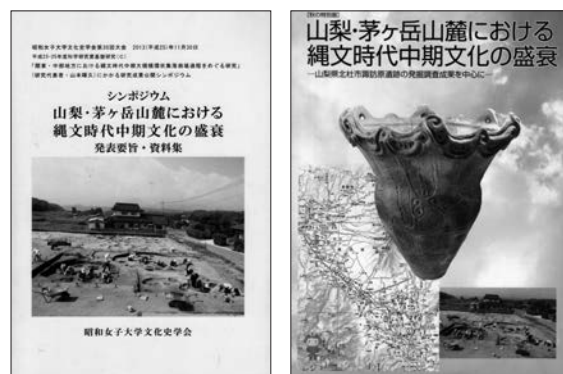
さて、大学での事務的な話はそこまでにして、大学で取り組んだ研究面の話をしてみたい。大学での研究は、毎年大学から支給される研究費のほかに、日本学術振興会に科学研究費を申請して採択された研究課題に支給された研究費を用いて取り組んだ。この科学研究費は、次の2課題が採択された。一つは、平成19-21年度科学研究費基盤研究(C)「縄文時代における柄鏡形(敷石)住居址の研究」で、これまで取り組んできた柄鏡形(敷石)住居址の研究をさらに深めることを目的としたもので、その研究成果は、研究成果報告書「縄文時代における柄鏡形(敷石)住居址の研究」(2010.3)としてまとめた。また、この成果をもとに「柄鏡形(敷石)住居と縄文社会」(2010.8 六一書房刊)を刊行した。続けて、平成23-25年度科学研究費基盤研究(C)「関東・中部地方における縄文時代中期大規模環状集落崩壊過程をめぐる研究」が採択され、研究を行ったもので、やはり私が多年にわたり研究を続けてきた、縄文時代中期末における中期環状集落の崩壊過程のメカニズムの解明をさらに目指したもので、前稿でも取り上げた山梨県北杜市諏訪原遺跡の中期大規模集落址の調査を通じて実践的に試みたものである。研究成果報告書は、山梨県北杜市教育委員会佐野隆氏と早稲田大学大網信良氏の協力を得て、「関東・中部地方における縄文時代中期大規模環状集落崩壊過程をめぐる研究」(2014.3)としてまとめている。

なお、それに先立ち、2013(平成25)年11月30日に昭和女子大学80年館6階オーロラホールにおいて「シンポジウム 山梨・

茅ヶ岳山麓における縄文時代中期文化の盛衰」を開催した。内容は、「総論 縄文時代中期大規模環状集落盛衰のもつ意味」と題して私が、佐野隆氏が「研究報告 山梨県茅ヶ岳西麓にみる縄文時代中期遺跡の動態と生業」を発表し、調査報告として大網信良氏により「諏訪原遺跡の調査成果①(北杜市教育委員会調査地区)」、昭和女子大学大学院小林寛子が「諏訪原遺跡の調査成果②(昭和女子大学調査地区)」のほか、(株)加速器分析研究所による昭和女子大学調査地区検出の炭化物の放射性炭素年代測定(AMS法)の結果報告がなされ、加えて昭和女子大学大学院井口真理子による「中部山地における底部穿孔倒置土器主要事例集成」が収録された発表要旨・資料集が刊行されている(写真参照)。

また、このシンポジウムにあわせて、昭和女子大学光葉博物館2013(平成25)年10-11月秋の特別展「山梨・茅ヶ岳山麓における縄文時代中期文化の盛衰—山梨県北杜市諏訪原遺跡の発掘調査成果を中心に—」(2013年10月28日～11月30日)(写真参照)を開催した。昭和女子大学による諏訪原遺跡の調査成果を紹介しつつ、その出土遺物ならびに北杜市教育委員会が所蔵する茅ヶ岳山麓の中期遺跡から出土した各種遺物を展示したものである。前稿でも触れたが、山梨県北杜市諏訪原遺跡の発掘調査は、毎年夏の約2週間、10年間継続して女子学生だけで炎天下調査を続けた思い出深い調査となった。

このほか、2003(平成15)年3月には、菊池誠一先生が調査を実施していたベトナムの北部ヴァンロック県(当時)にある胡朝城跡門3次元測量調査(2003年3/11～3/21)と翌2004年(平成16)8月には胡朝城跡発掘調査(8/16～8/28)に参加する機会を得た。胡朝城跡は、15世紀初頭の胡朝時代の城塞で、2011年7月にユネスコの世界遺産(文化遺産)に登録されている。ベトナムでの過酷な真夏の調査を経験したことが思い出深い。



▲シンポジウム資料集(2013.11.30)と展示図録(2013.10.28-11.30)

略歴

1947年3月	新潟県東蒲原郡鹿瀬町(現・阿賀町)生
1965年4月	早稲田大学第一文学部史学科國史専修
1970年4月	早稲田大学大学院文学研究科修士課程
1973年4月	神奈川県教育庁社会教育部文化財保護課
1978年5月	日本考古学協会員
1985年4月	山梨県立埋蔵文化財センター
1990年4月～1998年3月	早稲田大学第一文学部非常勤講師
1997年4月	財団法人かながわ考古学財団
2001年4月～2002年3月	昭和女子大学・同大学院非常勤講師
2001年11月	早稲田大学大学院文学研究科 博士(文学)
2002年4月	昭和女子大学大学院生活機構研究科教授
2003年10月	第4回宮坂英之記念 尖石縄文文化賞受賞
2010年9月～2017年3月	駒澤大学大学院人文科学研究科非常勤講師
2017年3月	昭和女子大学定年退職・名誉教授 現在に至る

隔月連載です。次回はいま書道先生です。

リーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 269

念誦岨墓地 ～奈良県桜井市

西谷 漸

はじめに

奈良県桜井市南部に広がる竜門山塊に所在する談山神社は、かつて妙楽寺という一大寺院であった。その起源は、藤原鎌足を供養するために十三重塔が建立された678年に遡るとされる。南北朝から戦国期には度重なる抗争を背景に大規模な城塞群が築かれ、江戸時代には最大42坊の子院と多くの別院・末寺を有する大寺院へと発展した。

現在の多武峰には、談山神社の社殿だけでなく、城塞跡や子院跡、多様な石造物など、往時の繁栄を伝える遺跡や遺物が残されている。こうした多武峰の数ある遺跡のなかで、今回紹介するのは、私が学士論文で研究対象とした念誦岨墓地である。

念誦岨墓地の沿革と増賀上人墓について

念誦岨墓地は、妙楽寺の末寺である紫蓋寺が所在した場所にある墓地である。紫蓋寺は、妙楽寺の中興の祖とされる増賀上人が当地で入寂したことを契機に、その御廟を中心として1187年に創建された寺院である。現在は廃仏毀釈によって伽藍を失っているが、方形二重基壇の上に築かれた二段の円形貼石塚からなる増賀上人墓が残され、その周囲には約900基の石塔が立ち並んでいる。石塔の約6割は妙楽寺などの僧侶墓で、室町時代末期から神仏分離までのおよそ300年間造立されたと考えられる。廃仏毀釈以降は一般庶民も利用するようになり、現在まで多武峰区の墓域として営まれている。

増賀上人墓については測量・発掘調査が行われ、石材加工や石種の違いから少なくとも2度以上の改修が推察されている(桜井市教育委員会文化財課編2011)。また、基壇に残る礎石の配置からは、時期の異なる2棟の建物が存在したことが明らかとなった。さらに、墓前の石段耳石には元亀2年(1571)の銘が刻まれており、室町時代末期には墓所の整備が進められていたことがわかる。増賀上人墓を中心に僧侶墓が造営され続けたことから、上人が篤く敬われ、この場所が多武峰における象徴的な場であったことがうかがえる。

中近世石塔群について

念誦岨墓地では石塔の悉皆調査が行われ、造立数の推移が明らかにされている(桜井市教育委員会文化財課編2011)。石塔の多くは16世紀後半に出現し、1570年代にピークを迎える。その後、16世紀末には急激に減少するが、これは1588年から1590年の大和郡山への遷座に伴う衆徒の流出が影響したと考えられる。1600年以降、衆徒が多武峰へ帰山すると造立数は再び増加し、1670年代、1780年代、1860年代にもピークが認められる。特に1860年代のピークは明治維新期と重なり、その後は減少へ転じている。この推移は大和の郷墓とは異なる傾向を示している。郷墓では17世紀後半から18世紀初頭に増加し、18世紀後半から19世紀中頃に減少、その後再び増加して20世紀にピークを迎える。一方、念誦岨墓地では17世紀中頃から後半にピークを迎え、18世紀初頭に減少した後、同後半に再び増加する。この違いは、念誦岨墓地が妙楽寺の僧侶墓を中心とす

る墓地であり、妙楽寺の歴史的事象が石塔造立数に反映されたためと考えられる。

石塔造立数の推移には大和の郷墓とは異なる動きがみられる一方、石塔形式の構成や変遷には共通性が認められる。念誦岨墓地では舟形五輪塔→舟形→櫛形→角柱形へと漸次移行しており、盆地内の墓地と共通する。なかでも筆者が目にするのが舟形五輪塔である。舟形五輪塔は、墓塔の小型化に伴って成立した形式で、念誦岨墓地では16世紀中頃から17世紀中頃にかけて造立された。その多くには周辺で採石された石英閃緑岩が用いられるほか、春日山周辺で採石されたとされる輝石安山岩(別称カナンボ石)製の資料も一定数確認される。輝石安山岩製の舟形五輪塔は奈良盆地北部を中心に盆地東側で広く分布すると指摘され(吉澤2004)、その存在から多武峰と奈良盆地との交流がうかがえる。今後、周辺地域を含めて事例を蓄積することで、中近世における多武峰と奈良盆地との地域間交流や石材流通のあり方をより具体的に考えることができるようになるだろう。

おわりに

念誦岨墓地は、中世以来、多武峰の僧侶たちにとって象徴的な場であるとともに、葬送の場として今日まで営まれてきた墓地遺跡である。石塔造立数の変化には妙楽寺の歴史の変動が反映されており、墓地から寺院の歴史を読み解くことのできる好例といえる。また、妙楽寺の門前町である西口・八井内・飯盛塚には16世紀代の石塔群が多数所在し、直属の郷である細川・高家・針道・倉橋では本格的な調査が未実施である。今後、これら周辺地域でも調査を進めることで、妙楽寺と各郷との関係、墓地形成と人口変動、石造物を介した人や情報の移動など、寺院と周辺村落との関係をより明らかにできるだろう。

石造物は地域の身近なところに残されており、そこに刻まれた歴史を明らかにすることで、地域の歴史に目を向けるきっかけになると考える。石造物を手がかりに過去の人々の営みを読み解き、その成果を地域と共有できるよう、これからも調査・研究に取り組んでいきたい。

引用文献:

桜井市教育委員会文化財課編2011『桜井市多武峰念誦岨地区の研究』桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第35集 桜井市教育委員会
吉澤悟2004『奈良盆地とその周辺地における近世石塔の造立傾向について』『国立歴史民俗博物館研究報告』111集 国立歴史民俗博物館



▲念誦岨墓地の景観

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは松木研太さんです。

考古学者の書棚

「水戸城公式ガイドブック」

水戸市教育委員会編／水戸市(2026)

関口 慶久

1 城ブームと水戸城の整備

2000年代半ば以降に盛り上がりを見せた「城ブーム」は、20余年を経た現在、文化財活用の主力コンテンツとして定着している。今日の城ブームは、考古学や文献史学による城館研究の蓄積を基盤としつつ、2006年の日本城郭協会による日本100名城の選定が起爆剤の一つとなった。さらにSNS映えする城館が脚光を浴びるとともに、YouTubeをはじめとする動画コンテンツの普及も相まって、城館愛好家の裾野は飛躍的に広がった。

城館をめぐる環境の拡大は、愛好家の増加だけでなく、城館に対する知識欲の高まり、すなわち「質」の向上をもたらしている。史跡に備え付けられた無料リーフレットのみでは、来訪者の多様化・高度化する知識欲に十分対応しきれない場面も増えている。

こうした中、水戸市は2020年に水戸城大手門、2021年に同二の丸角櫓・土堀の復元整備を行い、歴史的景観の可視化を進めてきた。これに伴い、水戸城への来訪者も年々増加しており、水戸城の認知度は整備前と比べ大幅に高まった。水戸市ではこの需要に答えるため、展示施設の充実、複数の無料リーフレットの作成、現地案内板の拡充等を行ってきた。一方、観光客や市民から「水戸城の全体像が一冊で把握できる体系的な書籍」を求める声が多く寄せられていた。

水戸城の整備を担った水戸市としても、限られたリーフレットや展示パネルでは伝えきれない、水戸城の多角的な情報を一冊にまとめて伝えたいという思いがあった。

以上のような利用者側のニーズと整備側の問題意識が合致し、刊行に至ったのが『水戸城公式ガイドブック』である。なお、筆者も編集担当の一人であるため、本稿では編集担当者の立場から、その編集意図と構成を紹介したい。

2 本書の内容

本書は、「水戸城がこれ一冊で分かる」というコンセプトに基づいて編集した。

導入部として、写真を多用し、視覚的に水戸城の理解を促す「水戸城フォトアルバム」と、千田嘉博氏による「特別インタビュー 水戸城の魅力を語る」の2編を冒頭に設けた後、本編に入る。

本編は、「水戸城の歴史」「城内の見どころ」「歴代城主」「城下町」「日本遺産 近世日本の教育遺産群」「水戸学の道」「城下町グルメ&お土産」の7章で構成されている。

さらに章間には7本のコラムを設け、巻末には「水戸城年表」を付した。

本書の核をなすのは、第1章から第4章である。

第1章「水戸城の歴史」では、水戸城周辺の地形・地質の説明を踏まえ、中世、近世、さらには近現代に至る水戸城の歴史を通史的にまとめた。これは、城館の歴史を廃城によって終わりとするのではなく、その後の土地利用を含む近現代の歴史まで視野に入れて捉えるべきであるとの問題意識に基づくものである。

第2章「城内の見どころ」では、水戸城の曲輪(下の丸・本丸・二の丸・三の丸)の空中写真(オルソ画像)を掲載し、現存の有無にかかわらず、主要遺構や見学ポイントの位置を写真上に示し

て解説を加えた。水戸城は現在、五つの学校が立地していることから、立ち入りが制限され、観光客が城館全域を散策することは難しい。そうした現状を補完する上でも、空中写真の掲載と遺構の図示は、主郭の構造を理解のために有用と判断した。

第3章「歴代城主」では、水戸城に在城した大塚氏、江戸氏、佐竹氏、徳川氏について系図を示すとともに、大塚氏10代、江戸氏10代、佐竹氏1代、徳川氏13代(水戸徳川家以前に入封した武田信吉、長福丸を含む)の計34人の当主について、それぞれの事績の概略を記した。本書はガイドブックとして携帯性と情報量のバランスを考慮し、総頁数を128頁にまとめたため、各当主の記述はささやかなものにとどまる。しかし、佐竹義宣や徳川光圀、斉昭などの人物は広く知られている一方、歴代城主を通覧する書籍はなく、専門家以外には容易にアクセスできなかった状況を踏まえれば、本章を設けた意義は少なくないと考えている。

第4章「城下町」では、水戸城の東西に展開した二つの城下町(上町・下町)と、水戸街道沿いに形成された台町の3エリアについて解説した。もとより城館の理解は、主郭のみならず城下町の発展を含めた視点が不可欠である。こうした視点から、第2章と同様にオルソ補正による空中写真を掲載し、城下町の主要なポイントを示した。

3 文化財の保存活用と本書の位置

冒頭に述べたとおり、本書は城ブームの需要に応えるべく刊行した一般向けのガイドブックであるが、考古学や文献史学による最新の調査研究成果を反映し、プロパーにとっても有用になるよう編集している。写真や図版を積極的に盛り込み、視覚的にも理解しやすい構成とした点も本書の特徴である。水戸城を知るための入門書として、一読を勧めたい。

最後に、文化財の保存活用と本書の位置について付言したい。本書は、経費のほぼ全額をガバメントクラウドファンディング(GCF)で賄い発行した。このような「稼ぐ」企画は昨今の文化財活用のトレンドとなっているが、筆者はかかる潮流を無制限に受け入れることには慎重な立場で、保存と活用の均衡を図るべきと考えている(拙稿2019「埋蔵文化財保護活動の動向」『日本考古学年報』第70号)。

重要なのは、稼いだ財源を文化財の認知度向上や保存にいかにも還元できるかという点にある。そうした観点から、市民の認知を深め、地域の歴史に愛着を持ってもらう本書のような取組は、財源を民間に求めてでも積極的に進めていくべきものと考えている。

水戸城は現在も史跡の未指定地が多く、これをいかに保存し、将来に伝えていくかが大きな課題と認識している。このような課題と向き合う中で、本書が、市民と行政が水戸城の保存活用のあり方を共に考えていくための一助となることを期待したい。

アルカ通信 No.277

発行日 2026年10月1日
企画 角張淳一(故人)
発行所 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801
長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp
URL: http://www.aruka.co.jp